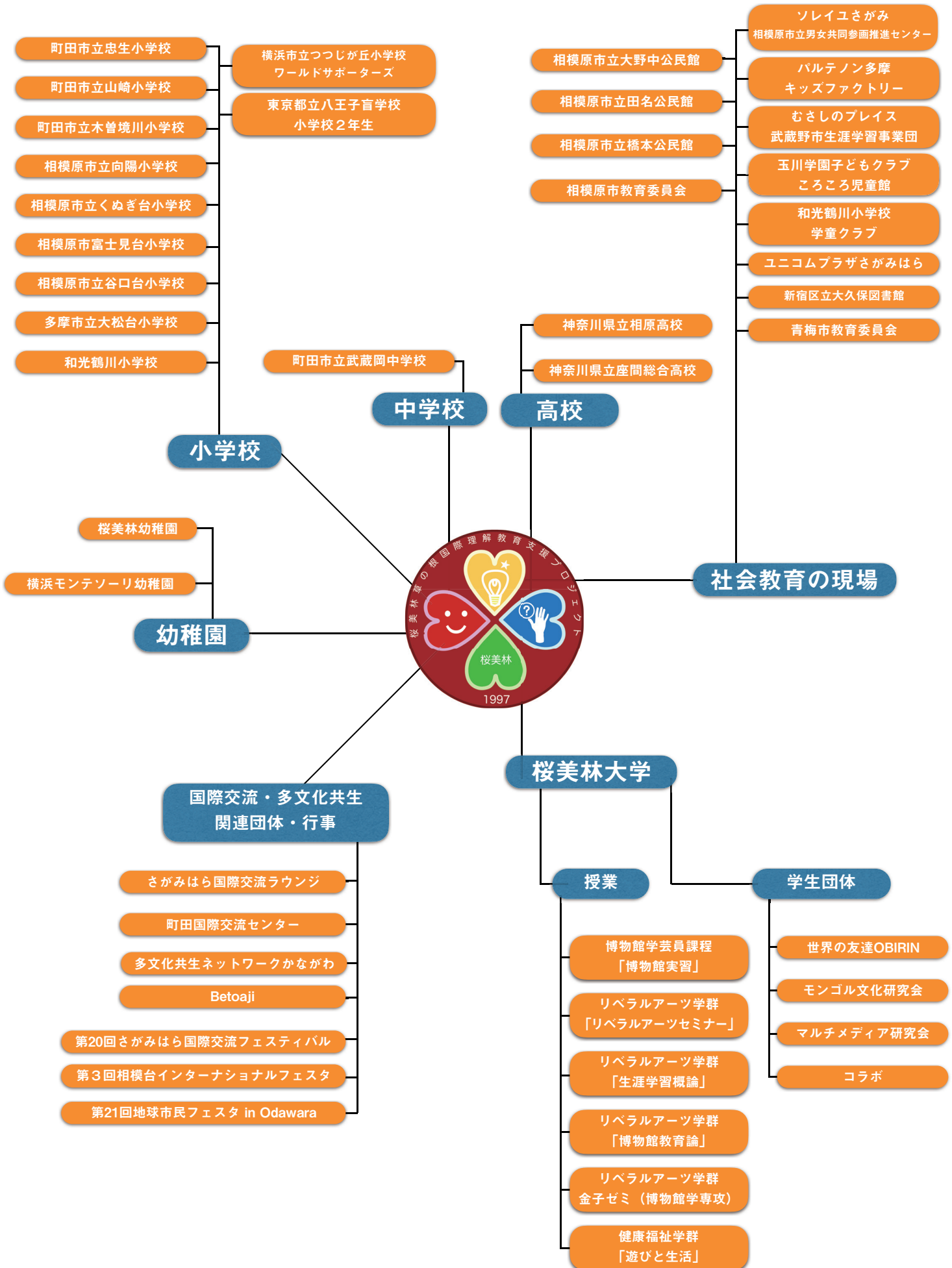




桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクトのあゆみ
Vol. 5 2016年度

2016年度にアウトリーチ教育プログラムの 依頼を受けた学内外の現場



草の根国際理解教育支援プロジェクトのあゆみ Vol. 5 2016年度

もくじ

 2016年度の活動を振り返って……………	3
 2016年度のメンバーと活動実績……………	7
 草の根プロジェクトキッズファンクラブ パスポートのねらいとアンケート調査……………	9
 開かれた学びの場を目指して ーやさしい日本語で学び合う博物館ー……………	15
 アウトリーチ教育プログラムによる ワークショップ・出張展示の実施概要……………	20
 卒業生によるエッセイ 「私が草の根プロジェクトで得たもの」……………	41
 卒業・帰国した留学生メンバー……………	43

2016年度の活動を振り返って

岩本 貴永

エデュケーター兼

アウトリーチ教育コーディネーター

私たち草の根国際理解教育支援プロジェクト（以下、草の根プロジェクト）は、2016年度も本学の近隣を中心に多くの教育現場の皆様からの依頼に応じて3つのアウトリーチ教育プログラムを実施した。1ページの図は、2016年度中にアウトリーチ教育プログラムを実施した教育現場を分類しまとめたものである。幼稚園から大学までの学校教育現場はもちろん、多種多様な社会教育施設等にも広がり、合計45の現場から依頼を頂いた。こうした多くの教育現場からのニーズもあり、アウトリーチ教育プログラムの実施件数はのべ82件となった（図1及び、7～8ページ参照）。このように、基本的な事業を活発に実行することができたことに加え、特筆すべきこととしては、「草の根プロジェクトキッズファンクラブパスポート」の開始、「上山民栄先生ご遺族による草の根P運営支援金」の受け入れがある。ここでは、2016年度における大きなトピックとして、これらについて振り返り、紹介していきたい。

アウトリーチ教育プログラム実施状況

3つのアウトリーチ教育プログラム別の実施件数は、国際学生訪問授業プログラムが18回、国際理解教育出張プログラムが33回、異文化発見キット貸出プログラムが31回となった（図

1参照）。

依頼元は、10年以上にわたって毎年依頼をいただく現場もあれば、初めての現場もあった。例えば、武蔵野市で実施している「土曜学校世界を知る会ジュニア」は、最初の2003年度から数えて14回目となった。他にも初めて依頼を受けて以来、毎年継続的に依頼される現場がいくつか見られる。一方、新たに依頼を受ける現場もあった。特に近年は相模原市の学校、社会教育施設における実施が増えている。

また、こうした地域の多様な現場における実践を積み重ねて培ったチエ・ワザを、学内の教育にフィードバックする機会も広がった。「博物館教育論」、「生涯学習概論」といった博物館学芸員課程の必修科目の授業では、各学期に本プロジェクトがワークショップを実施することが既に定着している。さらに、2016年度からは、リベラルアーツ学群の必修科目である「リベラルアーツセミナー」においても、担当教員からの依頼に応じてワークショップを実施することとなり、今年度3回実施した。

アウトリーチ教育プログラムの実施先を「学校教育の現場」、「社会教育の現場」、「桜美林学園内」の3つに分類してみると、それぞれにおける実施件数は25件、38件、19件となった。全体的には社会教育で活用される機会がやや多いものの、桜美林学園内における実施件数も目立つようになっている。各アウトリーチ教育

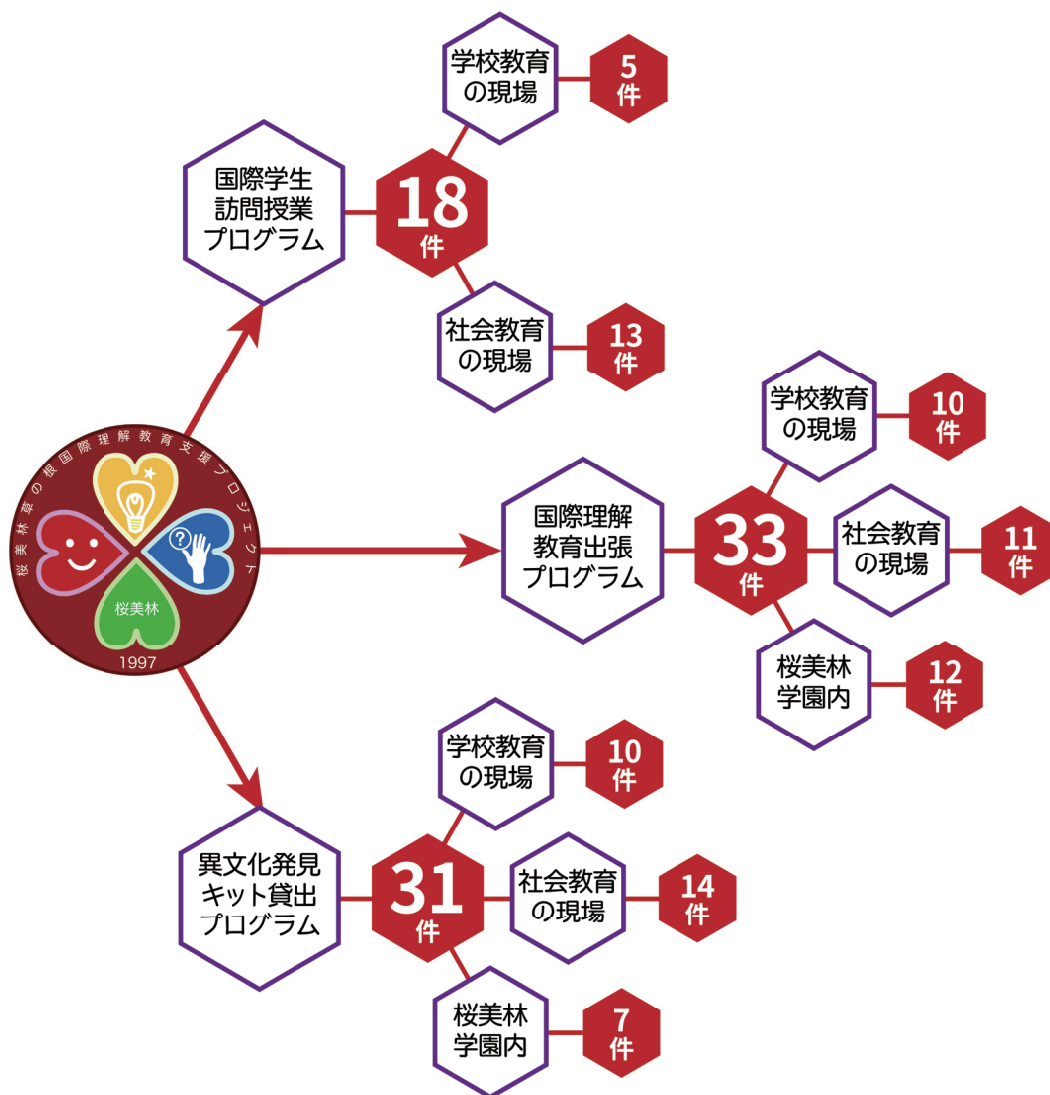


図1 2016年度のアウトリーチ教育プログラム実施状況（プログラム別・実施先の種類別）

プログラムの実績一覧は7～8ページの表を、また国際学生訪問授業プログラムと国際理解教育出張プログラムについては、21～40ページで概要を紹介しているので参照されたい。

草の根プロジェクト キッズファンクラブパスポートの開始

2016年度に開始した新たな試みとして「草の根プロジェクトキッズファンクラブパスポート」（以下、パスポート）がある（図2参照）。これはいわゆるスタンプカードで、本プロジェクトが提供する学びの場を利用する参加者との関係強化を目的の一つとして、10月以降に配布を開始した。誰でも参加可能な形で実施するワークショップや、世界の遊びの出張展示等で子どもたちを対象に配布している。このカードには、事前申し込み制のワークショップの場合、

申し込み、参加することによってスタンプを付与する。また、出張展示では、展示資料の世界の遊び道具や民族服等を活用した「ミッション」と称する課題をクリアすることで、スタンプを付与している。例えば、特定の国のコマを回したり、学生スタッフに遊び方を尋ねてボードゲームで遊ぶこと等、これまでに多様なミッションを提示してきた。こうしたミッションをクリアしたいという動機が、展示物に対する視野を広げ、体験をより豊かなものにする助けになると考えられる。このような方法でスタンプを集めることにより、本プロジェクトによるオリジナルグッズをプレゼントしている。

このように、パスポートはワークショップや体験展示に足を運ぶ動機付けのほか、こうした学びの機会が本プロジェクトによって提供されているということ、地域の家庭が認知する

外面



中面

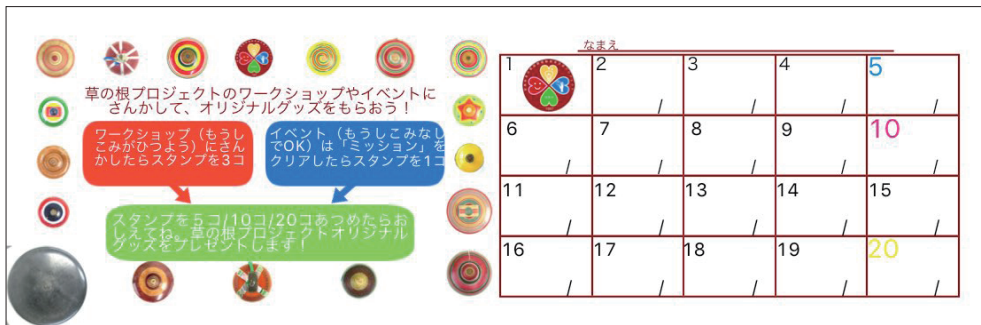


図2 草の根プロジェクトキッズファンクラブパスポート

きっかけとなるものと期待できる。

さらに、ミッションとしてアンケート調査を組み込むことによって、パスポートを来場者とのコミュニケーションの機会を作り出す仕掛けとしても活用している。このアンケートの対象は体験型のミッションをクリアした子どもと、同伴している場合はその保護者としている。このアンケートの主な目的は、一生活者として本プロジェクトが実施しているワークショップや体験展示をどのように受け止めているのか、子どもと大人それぞれの視点から探るものである。このアンケート調査は、まだ手探りではあるものの、本プロジェクトが地域社会において、どのような存在であるのかについて客観的なイメージを見定め、アウトリーチ教育プログラムがどのような影響を与えているのか、また地域貢献事業としての意義などについて検討する材料になるのではないかと考えている。11～14ページでは、10月から3月に実施したアンケートの結果のうち、保護者からの回答について報告しているので参照されたい。

上山民栄先生ご遺族による 草の根P運営支援金の運用開始

本プロジェクトは、1997年に故・上山民栄先生が発起人となり、本学の教員と共に活動が

始まった。上山先生は、生涯に渡り日米で教育に身を捧げられ、2013年4月18日に亡くなられた。その後、先生のご遺族からのお申し出があり、上山先生が残されたご遺産の一部が本プロジェクトの運営資金として本学に寄付され、2016年4月より「上山民栄先生ご遺族による草の根P運営支援金」として運用を開始した。

上山先生は、1949年に東北大学に入学、1953年に卒業後東京都内の中学校で国語科教員として教師のキャリアを歩み始められた。現場で出会った先輩教員の大村はま氏（戦後国語教育の第一人者）を師と仰ぎ、生涯にわたり共に国語教育研究に貢献された。1960年に中学校教師を退職して渡米し、南カリフォルニア大学大学院で修士課程を修了後は、ワシントン大学、ハーバード大学で日本語や日本文学を担当された。1969年から日本に戻るまでの20年間はワシントン大学で教鞭をとられた。

1977年にセントルイス大学で比較教育学の博士号を取得され、ワシントン大学では教授を務められた。1989年、本学国際学部設立に際して帰国され、学科長、学部長を歴任後、2001年3月に退職された。

上山先生は、ワシントン大学に在籍中に大学で教員としての仕事のほか、個人的にアメリカ



国際学部長在任中（1994年）の上山先生

における日本理解につながる教育活動に取り組まれていた。日本文化を体験的に学ぶための教材として実物を収集され、それらを使った教育活動に現地の教師と協力して取り組まれている。こうした活動が上山先生の中で本プロジェクトの原点となったといえよう。その後、本学在職中の1996年に研究休暇を利用して草の根プロジェクトの立ち上げに必要な準備作業を始め、1997年に活動を開始した。それから2017年度で20周年を迎える。本プロジェクトとしては、この貴重なご寄付を活かし、アウトリーチ教育プログラムをはじめとした教育支援事業を長く安定的に継続し、さらに広く深く学内外の教育現場と連携し、地域の教育に貢献していきたい。

活動開始20周年と アウトリーチ教育プログラムの再編

最後に、2017年度に実施するアウトリーチ教育プログラムの再編について触れておきたい。現在のアウトリーチ教育プログラムは、2008年度に前代表の故・高橋順一先生の下でスタートした。留学生の地域の教育現場への訪問事業は1999年度から、実物資料の教材としての貸出事業は2001年度から開始しており、2008年度からそれぞれ「国際学生訪問授業プログラム」、「異文化発見キット貸出プログラム」と名を冠することとした。同時に、草の根プロジェクトが主体となりヒト・モノを活用した教

育活動を実施する「国際理解教育出張プログラム」を加えることで、地域の教育に貢献する具体的な手立てである、「アウトリーチ教育プログラム」の3本柱とした。

当初、これらのプログラムは、地域からの依頼に応じ、それぞれヒトとモノは個別に活用する形式を想定していた。しかし、それから約10年に渡って、さまざまな依頼内容や対象者、環境に対応しながらアウトリーチ教育プログラムの実践に取り組むことで、想定していた枠組みを超えた形が見られるようになっている。例えばそれは、ヒト・モノを統合的に活用する形である。国際理解教育出張プログラムでは、実物を体験的に活用するワークショップを地域の教育現場で実施する。通常は子ども同士がグループを形成しアクティビティに取り組む。一方新たな形では、そこに留学生が子どもたちのパートナーとして参画する。実物（モノ）を活用したアクティビティに留学生（ヒト）がパートナーとして活動することで、異文化間の協働的な体験活動を実現する、という形に発展している。

このように、従来アウトリーチ教育プログラムを基礎に、新たな取り組みを繰り返すことで、ヒト、モノ、チエ・ワザを活用する新たな形を見出している。そこで、20周年を期に本プロジェクトが学内外の教育現場に対し、どのような形で貢献することができるのか改めて整理し、アウトリーチ教育プログラムを3つから5つに再編成することとした（詳細は2017年度版「アウトリーチ教育プログラム利用の手引き」を参照されたい）。各プログラムでどんなことができるのか、またそれぞれにどんな特徴があるのかを明確化することで、関心を持つ教育現場の方々により強くアピールすることがねらいである。これを機に、さらに多くの教育に携わる人々や参加者につながり、本プロジェクトならではの活動的な学びを届け、学内外の教育に貢献していきたい。



2016年度メンバーと活動実績

代表

石塚 美枝（教員 / 日本語教育）

運営委員

荒木 晶子（教員 / コミュニケーション）

鷹木 恵子（教員 / 文化人類学）

浜田 弘明（教員 / 博物館学）

福原 信広（職員 / 地域・社会連携室）

エドゥケーター

清水 貴恵（教員 / 生涯学習・国際理解教育・日本語教育）

エドゥケーター 兼 アウトリーチ教育コーディネーター

岩本 貴永（専属スタッフ / 博物館学芸員有資格者）

学生

<リベラルアーツ学群>

西郷 菜奈美、バヤルト オド ツォルモン（ツォモ）、金澤 穂香、戸谷 美森、長田 萌香、小澤 知歩、後藤優衣、椎橋 郁美、山中 里帆菜

<ビジネスマネジメント学群>

兼田 舞、呉 文睿、ダン ゴック クィン、プア ジェイソン

<留学生別科>

カオ トゥイ ディエン、グエン トゥイ リン、ファン フィン バオ ニェン、郭 楠菁

<交換留学生>

ブジンラハム ソロンゴ、バートルツォクト ナムーンダリ（ナムナ）、楊 憶瑶、

<卒業生>

櫻井 あや、ダン ゴック アン、廣田 光、

国際学生訪問授業プログラム実施記録（2016年度）

No.	月	日	訪問先	対象学年	参加者	訪問した留学生の出身国				合計
						中国	バトナム	マレーシア	モンゴル	
1	5	15	第3回相模台インターナショナルフェスタ	指定なし	412		1		1	2
2	5	25	神奈川県立相原高校総合ビジネス科	3年生	38	2	1	1	2	6
3	6	18	武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニア①	1~3年生	23	1	1	1	2	5
4	6	29	町田市立忠生小学校	4年生	100		1		2	3
5	7	16	武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニア②	1~3年生	18		1		2	3
6	7	18	体験する文化祭（相模原市中央区）	1~6年生	47	1	1		1	3
7	7	23	世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム「世界の学校」（低学年）	1~3年生	14	1	2		2	5
8	7	23	世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム「世界の学校」（高学年）	4~6年生	10	1	3		1	5
9	10	2	さがみはら国際交流フェスティバル	指定なし	230		1		1	2
10	10	16	第3回ユニコムプラザさがみはらまちづくりフェスタ	指定なし	34	1	1		1	3
11	11	16	町田市立木曽境川小学校①	3年生	90		2		1	3
12	11	16	町田市立木曽境川小学校②	4年生	57		2		1	3
13	11	26	青梅市教育委員会国際理解講座①	5年生	31		2		1	3
14	11	26	青梅市教育委員会国際理解講座②	12~16歳	31		2		1	3
15	12	7	町田市立武蔵岡中学校	1~3年生	75		2		1	3
16	12	10	おもてなしカレッジ in 田名 中級編（相模原市立田名公民館）	4~6年生	18	1	1		1	3
17	1	22	相模原市立橋本公民館 第33回子どもまつり	指定なし	415	1	1		1	3
18	2	26	小田原市地球市民フェスタ	指定なし	220	1	1			2
合計					1863	9	26	2	21	52

国際理解教育出張プログラム実施記録(2016年度)

No.	実施日	タイトル	会場	利用先種別	参加人数
1	4/2	町田市さくらまつり(芹が谷公園会場)	町田市芹が谷公園	イベント	428
2	5/12	リベラルアーツ学群リベラルアーツセミナーオプションワークショップ(金子淳先生)	桜美林大学 其中館301	ワークショップ	12
3	5/15	第3回相模台インターナショナルフェスタ	相模原市南台公園	イベント	412
4	5/16	リベラルアーツ学群リベラルアーツセミナーオプションワークショップ(鷹木恵子先生)	桜美林大学 荊冠堂	ワークショップ	12
5	5/26	リベラルアーツ学群リベラルアーツセミナーオプションワークショップ(井上直子先生)	桜美林大学 荊冠堂	ワークショップ	12
6	6/3	リベラルアーツ学群「生涯学習概論」	桜美林大学 荊冠堂	ワークショップ	40
7	6/18	武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニア①	武蔵野プレイス	ワークショップ	23
8	7/13	リベラルアーツ学群「博物館教育論」	桜美林大学 待望館	ワークショップ	40
9	7/16	武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニア②	武蔵野プレイス	ワークショップ	24
10	7/18	体験する文化祭(相模原市中央区)	相模原市産業会館	ワークショップ	47
11	7/23	世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム「世界の学校」(低学年)	桜美林大学第二国際寮	ワークショップ	16
12	7/23	世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム「世界の学校」(高学年)	桜美林大学第二国際寮	ワークショップ	10
13	7/25	相模原市立向陽小学校サマースクール(低学年)	相模原市立向陽小学校	ワークショップ	21
14	7/25	相模原市立向陽小学校サマースクール(高学年)	相模原市立向陽小学校	ワークショップ	15
15	7/26	おもてなしカレッジ in 田名初級編(相模原市立田名公民館)	相模原市立田名公民館	ワークショップ	24
16	8/4	健康福祉学群「遊びと生活」	桜美林大学 サレンバーガー館	ワークショップ	14
17	8/25	町田市立忠生小学校サマースクール	町田市立忠生小学校	ワークショップ	24
18	9/15	相模原市立くぬぎ台小学校6年(2クラス)	相模原市立くぬぎ台小学校	ワークショップ	63
19	10/2	第20回さがみはら国際交流フェスティバル	桜美林大学第二国際寮	イベント	230
20	10/16	第3回エココムプラザさがみはら まちづくりフェスタ	相模原市エココムプラザさがみはら	ワークショップ	34
21	10/26	相模原市立谷口小学校クラブ活動	相模原市立谷口小学校	ワークショップ	18
22	11/18	リベラルアーツ学群「生涯学習概論」	桜美林大学 荊冠堂	ワークショップ	49
23	12/3	パルテノン多摩キッズファクトリー ワークショップ	パルテノン多摩	ワークショップ	7
24	12/4	相模原市大野中公民館 第29回公民館まつり	相模原市立大野中公民館	イベント	91
25	12/10	おもてなしカレッジ in 田名初級編(相模原市立田名公民館)	相模原市立田名公民館	ワークショップ	18
26	12/16	リベラルアーツ学群「博物館教育論」	桜美林大学 明々館	ワークショップ	90
27	1/22	相模原市立橋本公民館 第32回橋本こどもまつり	相模原市立男女共同参画推進センター	イベント	415
28	1/25	相模原市立富士見小学校1年生(5クラス)	相模原市立富士見小学校	ワークショップ	129
29	1/27	相模原市立富士見小学校1年生(3クラス)	相模原市立富士見小学校	ワークショップ	98
30	2/24	町田市立山崎小学校6年生2クラス	町田市立山崎小学校	ワークショップ	55
31	2/26	第21回地球市民市民フェスタ	小田原市川東タウンセンターマロニエ	イベント	345
32	3/5	相模原市立田名公民館 第22回田名こどもまつり	相模原市立田名公民館	イベント	311
33	3/15	相模原市立富士見小学校2年生(5クラス)	相模原市立富士見小学校	ワークショップ	151
国際理解教育出張プログラムとして実施したワークショップ・イベントの参加者数合計					3278

異文化発見キット貸出プログラム実施記録(2016年度)

No.	貸出	返却	利用先	利用者所属	参加人数
1	4/22	4/25	桜美林大学学内イベント「ウィルビリン」 モンゴル文化研究会	モンゴル文化研究会(桜美林大学)	20
2	5/11	5/17	あーすフェスタかながわ「世界のおそびば」民族衣装コーナー 5/16-17	多文化共生ネットワークかながわ	500
3	6/3	6/6	異文化間教育学会懇親会における民族衣装ファッションショー	世界の友達OBIRIN(学生団体)	100
4	6/10		マレーシア交流会(学生主催イベント)	コラボ(学生団体)	11
5	7/21	7/27	新宿区立大久保図書館お話し「アラブのヤシの木-アラブ人は砂漠の民?いえいえ農業もしていましたよ」	新宿区立大久保図書館	41
6	7/28	8/5	玉川学園子どもクラブころころ児童館	玉川学園子どもクラブころころ児童館	19
7	8/25	8/12	さがみはら国際交流ラウンジ	さがみはら国際交流ラウンジ	-
8	8/25	9/8	Betoaji(ベトアジ)「Bunji Global Festa 2016」	Betoaji	-
9	9/13	9/23	横浜市立つつじが丘小学校全クラス対象授業	つつじが丘小学校ワールドサポーター	500
10	9/21	10/18	桜美林幼稚園運動会	桜美林幼稚園	403
11	9/30	10/17	横浜モンテソーリ幼稚園 保護者による「世界紹介」	横浜モンテソーリ幼稚園	103
12	10/12	11/1	多摩市立大松台小学校 5年生学芸会	多摩市立大松台小学校	1100
13	10/13	11/24	町田市立忠生小学校わくわくクラブ	桜美林大学学芸員課程実習(子どもの学びづく)	20
14	10/14	10/17	和光鶴川小学校沖縄学習旅行20周年記念鶴小エイサーまつり	和光鶴川小学校学童クラブ	100
15	10/25	11/4	町田国際交流センター 第19回町田国際ボランティア祭2016夢広場	町田国際交流センター	70
16	10/25	11/18	相模原市立谷口小学校 全校音楽集会上における6年生の発表	相模原市立谷口小学校	1300
17	10/26	11/1	桜美林大学マルチメディア研究会 大学祭展示	マルチメディア研究会	132
18	10/26	11/1	桜美林大学金子ゼミ 大学祭展示	金子ゼミ	153
19	11/1	11/18	神奈川県立座間総合高校 国際フェスタ	神奈川県立座間総合高校 教育開発グループ	900
20	11/17	11/21	町田市立南中学校(特別支援学級)における町田国際交流センターによる教	町田国際交流センター	8
21	11/26		青梅市教育委員会 国際理解講座5年生	草の根プロジェクト	31
22	11/26		青梅市教育委員会 国際理解講座6年生~中学生	草の根プロジェクト	31
23	12/1	12/5	新宿区立大久保図書館	新宿区立大久保図書館	67
24	12/2		まちカフェ(町田市役所におけるイベント)	町田国際交流センター	150
25	12/7		町田市立武蔵岡中学校全校対象ワークショップ	草の根プロジェクト	75
26	1/13	1/17	相模原市立谷口小学校 6年生	相模原市立谷口小学校	300
27	1/16	2/3	和光鶴川小学校 2年生 生活科	和光鶴川小学校	28
28	1/18	2/22	相模原市立くぬぎ台小学校6年生	相模原市立くぬぎ台小学校	30
29	2/13	2/22	町田市立忠生小学校2年生	町田市立忠生小学校	80
30	2/24	3/14	東京都立八王子盲学校 2年生	東京都立八王子盲学校	3
31	3/6	3/21	和光鶴川小学校 1年生	和光鶴川小学校	60
異文化発見キットを利用した授業・イベント・その他教育活動への参加者数合計					5759

キッズファンクラブパスポートの ねらいとアンケート調査

岩本 貴永

アウトリーチ教育コーディネーター
エデュケーター

1. パスポートのねらい

本プロジェクトは、4～5ページで紹介した通り、2016年10月より学校外の社会教育活動として実施するアウトリーチ教育プログラムにおいて、「草の根プロジェクトキッズファンクラブパスポート（以下、パスポート）」の配布を開始した。

アウトリーチ教育プログラムは、基本的に町田・相模原を中心とした地域の教育現場の担当者からの依頼で実施しているが、本プロジェクトによるワークショップや遊び道具等の出張展示を毎年恒例の活動として位置付けている事例が見られる。年に一度ではあっても、毎年同じ会場で活動を継続することで、繰り返し足を運んでくれる子どもたちや家族連れと出会う機会が少しずつ見られるようになった。彼らもまた私たちのことを覚えてくれており、嬉しそうに得意な遊び道具を教えてくれたり、ボードゲームと一緒に何度も楽しんだりしたこともあった。このように、本プロジェクトによるワークショップや体験展示が、子どもはもちろん、大人も一緒に楽しみ、それぞれに何か気づきを得られる場として認知されていることを、現場で機会を重ねるたびに実感するようになっていく。現場におけるこうした実感を出発点に、本プロジェクトと一般参加者との関係性を強化することがパスポートの第一のねらいであ

る。参加者は、さまざまな現場で開催するワークショップや出張展示に参加することで、パスポートにスタンプを収集することができる。一定数のスタンプが集まったら、本プロジェクトが製作した実物資料に関連するオリジナルグッズをプレゼントする。図1、図2はこうした仕組みを伝えるパスポートのチラシである。

このように、本プロジェクトの活動に参加した子どもたちや家族連れが、「また参加したい」、「今日は展示を楽しんだけど、ワークショップにも参加してみたい」と思えるような仕掛けとして機能することが期待できる。また、異なる会場で開かれるワークショップや体験展示に関連付け、本プロジェクトのファンを創出することが可能になる。

2. スタンプ集めとアンケート調査

もう一つのねらいは、こうしたプロセスに参加する人々がどのように本プロジェクトを認識し、評価しているのかを明らかにするためのコミュニケーションの機会を創出することである。これまで多くの参加者が、それぞれに楽しい時間を過ごし、何らかの気づきを持ち帰っていると考えられる。しかし、そうした人々が本プロジェクトをどのように認知し、どのように評価しているのか、断片的に話を聴く機会があっても、計画的に調べたことはなかった。



図1 パスポートを紹介するチラシ (表面)



図2 パスポートを紹介するチラシ (裏面)



図3 ミッションシート (2017年3月5(日))

世界の遊びと衣装の出展博物館アンケート 2017/3/5

親子アンケート 保護者編

Q1 お住まいの郵便番号をご記入ください。
郵便番号 ()

Q2 今日はどなたと一緒にいらっしゃいましたか。ご自身を含めて年齢と性別をご記入ください。
子ども ① 才(男/女) ② 才(男/女) ③ 才(男/女) ④ 才(男/女)
大人 ① 代(男/女) ② 代(男/女) ③ 代(男/女) ④ 代(男/女)
*ご自身の部分にOをつけてください。

Q3 草の根プロジェクトが行った世界の遊び道具や衣装の展示、ワークショップにこれまで参加したことはありますか? Oをつけてください。
今回はじめて ・ ある → 今回は何回目ですか? 覚えていらっしゃったらご記入ください。 ___回目

Q4 今回はどのようにして知りましたか? 当てはまる項目をOでかこんでください。該当するものを全てお選びください。
・友達にさせられた ・ チラシ ・ ホームページ ・ フェイスブックページ ・ イベント会場に来て初めて知った
・ その他

Q5 いろいろな活動を体験してお子さまはどのような様子でしたか? 該当するものを全てお選びください。また、特に印象に残っているお子さまの姿がありましたら具体的に教えてください。
・ 集中していた ・ 楽しんでいた ・ 驚いていた ・ 興味を示していた ・ 緊張していた ・ リラックスしていた
・ その他
特に印象的な様子

Q6 本展示でご自身が何かはじめて知ったこと、気づいたことがありましたらご記入ください。

Q7 本日のような学びの場を地域に提供する本プロジェクトについて、どのように思いますか。該当するものを全てお選びください。
・ 親しみを感じる ・ 地域に貢献しようとする姿勢を感じる ・ こうした機会をもっと増やしてほしい
・ 大学と接するきっかけになる ・ 桜美林大学の学生とコミュニケーションをとる機会となる
・ 普段できない体験をさせてくれる ・ ユニークだと感じる
*その他にございましたら下の空欄にご記入ください

Q8 また来たいと思いますか?
・ ぜひ来たい ・ 都合が合えば来たい ・ 興味がある内容なら来たい ・ どちらでもない ・ もう来ない

ご協力ありがとうございました! 用紙は黒いユニフォームのスタッフにお渡しください。また、スタンプをお子さまのパスポートに押しまわってお手元にご用意ください。

図4 アンケート用紙 (保護者用)

表1 体験展示の実施日時と来場者数、回答者数

日時	タイトル	来場者数	回答者数(保護者)	回答者数(子ども)
2016年10月2日(日)	第20回さがみはら国際交流フェスティバル	230	26	29
2016年12月4日(日)	相模原市大野中公民館 第29回公民館まつり	91	8	14
2017年1月22日(日)	相模原市立橋本公民館 第32回橋本こどもまつり	415	29	86
2017年2月26日(日)	第21回地球市民市民フェスタ	345	44	76
2017年3月5日(日)	相模原市立田名公民館 第22回田名こどもまつり	311	12	41
		1392	119	246

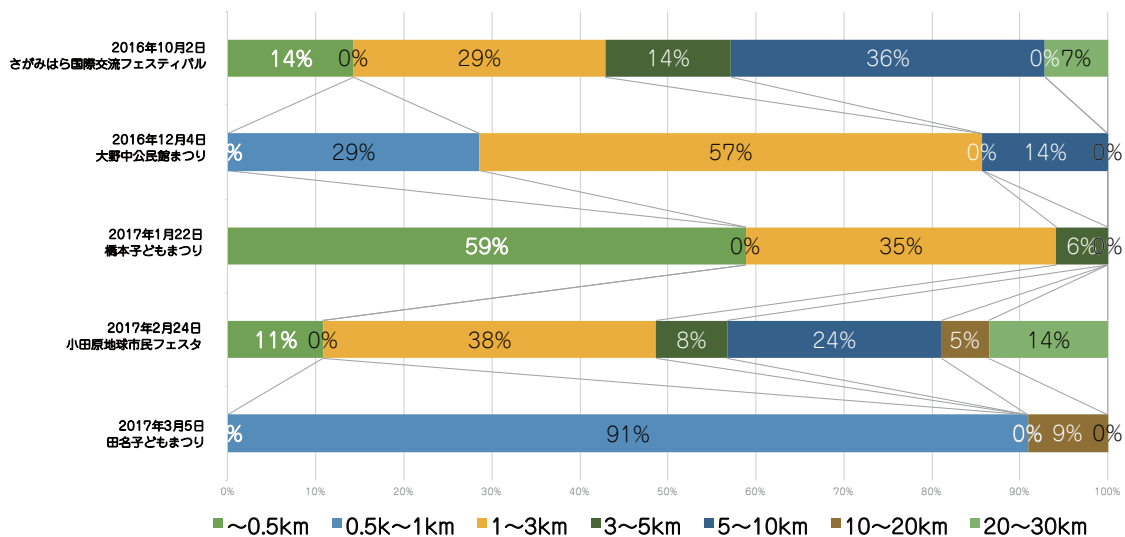


図5 出張展示の会場から来館者の居住地までのおおよその距離とその割合

学校の授業や社会教育における講座としてワークショップを実施する場合には、振り返りの活動の一つとしてアンケート用紙への記入を予め準備することは可能である。しかし、体験展示では、実施時間が長い時には6時間に渡り、入退場が自由であるため、限られたマンパワーで確実に回収するのは困難であった。そこで、パスポートにスタンプを集める課題である「ミッション」の一つとして、アンケート用紙(図4参照)への記入を設定することとした。

出張展示では、パスポートにスタンプを集める方法として、「ミッション」と題した課題をクリアすることを求めている。一度の体験展示につき、3~4つのミッションを提示しており(図3参照)。そのうちの1つを除いて実物資料の体験を促すものとし、残り1つをアンケートへの回答とした。こうしてパスポートにスタンプを集める手段として組み込むことによって、参加者がアンケートに自発的に回答する動機付けとした。また、体験展示では、子どもたちだけでなく同伴の保護者が多数来場するため、用

紙を両面印刷とし、子どもと大人両方の声を拾うことができるようにした。

パスポートは、このように活用することで、地域における本プロジェクトのイメージを読み取り、活動を振り返るための材料を収集するツールにもなっている。

3. アンケートの結果

こうした方法によって、2016年10月以降の5回の出張展示において、アンケート調査を実施した。その結果、119名の保護者と246名の子どもから回答を得ることができた(表1)。ここでは、これまで参加者としての声を拾い上げる機会が少なかった、保護者のアンケート結果に絞って結果を紹介する。保護者を対象としたアンケートはQ1からQ8の計8問の質問からなっている。各問はQ6と選択肢に対する任意の記述部分を除いて選択式とした。

Q1では、回答者に居住地の郵便番号を尋ね、これにより会場との距離を推定した。その結果

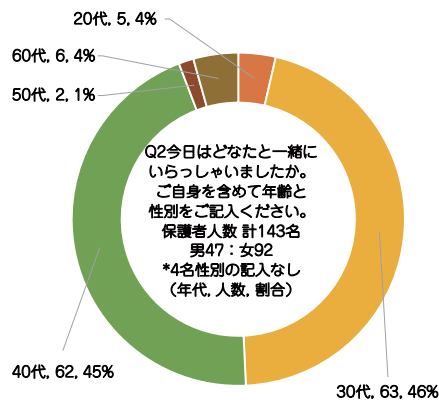


図6 Q2の結果 (子ども)

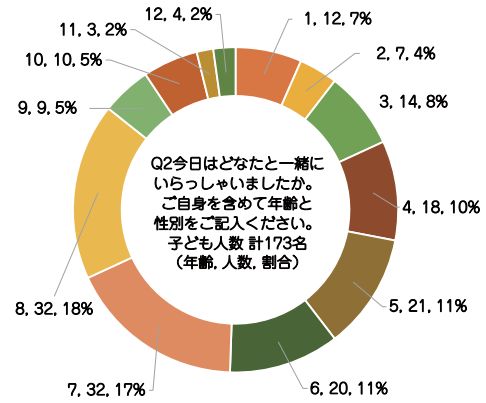


図7 Q2の結果 (保護者)

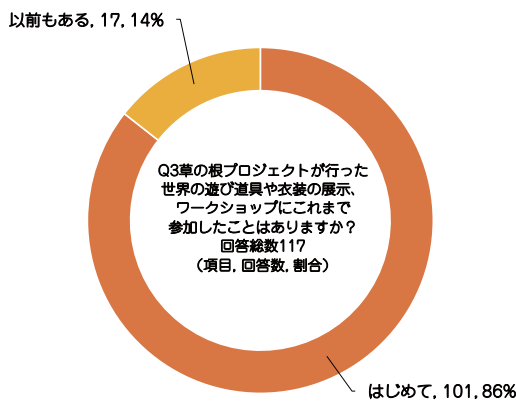


図8 Q3の結果

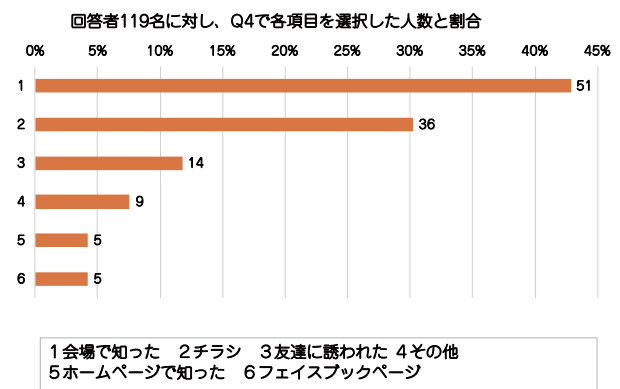


図9 Q4の結果

をまとめたのが図5のグラフである。ここでは、会場ごとに居住地との距離によって回答者を分類し、回答者全体に対する割合を示している。

5回行った体験展示の会場となった行事は大きく2つに分類することができる。一つは公民館が主催するもの(2016年12月4日、2017年1月22日、同3月5日に開催)、もう一つは自治体の国際交流・多文化共生を推進する組織が主催するものである(2016年10月2日、2017年3月5日開催)。前者は1km圏内から来ている回答者が80%を超えている。後者についても、1km圏内が40～50%を占めているが、より遠距離からの来館者も半数近く見られた。

また、小田原で実施した1件を除き、全てJR横浜線を最寄駅とする会場で実施しており、概ね町田駅から橋本駅の沿線地域から来ているということが分かった。

Q2では、回答者に対し、子どもと保護者に分け、自分を含め一緒に誰が来場したのか尋ね、結果は図6、図7のグラフの通りになった。保

護者の90%を30代、40代が占め、両者はほぼ同数であった。一方、子どもは1歳から12歳までと幅広いが、6歳～10歳までが半数である。

Q3では、体験展示への来場経験の有無を尋ねた。その結果、図8のグラフの通り、86%が初めて、残りが2回目という結果になった。5回実施した出張展示のうち、2016年度に初めて実施した会場は1つ、残りは2回以上実施した実績があった。

Q4では、どのようにして体験展示が開催されていることを知ったのか尋ねた(複数回答可)。図9のグラフをみると、何らかの形で事前に情報を得ていた回答者と、その反対に事前に情報を得ずに、イベント会場に来てから初めて知った回答者が約半々となった。

ただ、体験展示実施に際しては、行事の主催者が作成したチラシの中に掲載されたり、本プロジェクトが独自のチラシを作成したりするパターンがある。また、ネット上の告知も同様に重複する場合があります。本プロジェクトと主催側

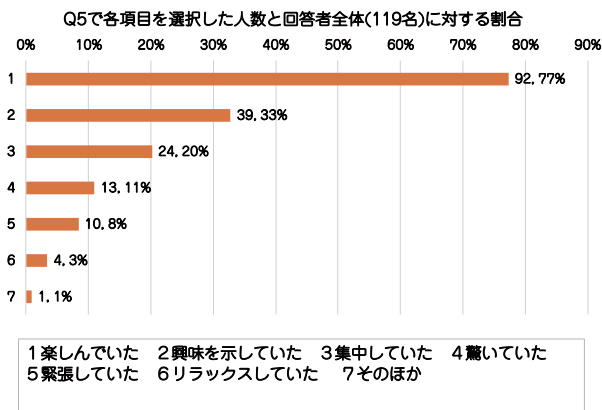


図 10 Q5 の結果

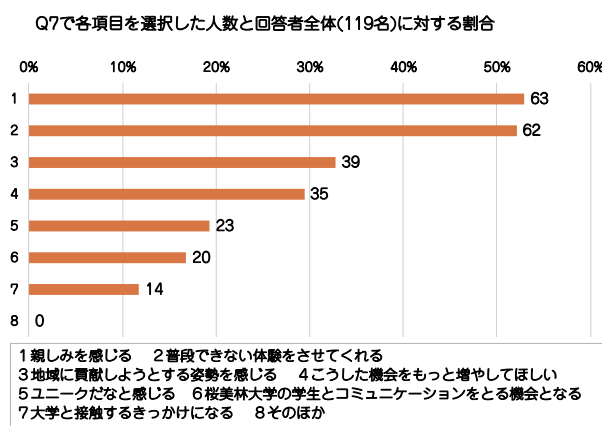


図 11 Q7 の結果

のどちらの媒体に接したのかについては、今回の調査では不明である。

Q5では、保護者から見て、学生ファシリテーターと共にさまざまな活動をする子どもたちの様子を尋ねた(複数回答可)。図10のグラフをみると、約半数の保護者が子どもたちは「楽しんでいた」と答えている。他には、「集中していた」、「興味を示していた」が約20%となった。また「驚いていた」、「緊張していた」が約10%となっている。

Q6では、保護者自身が体験展示を通じて、何か新たな気づきを得られたのかどうか尋ねた。この問いに対しては、44名が回答し、その記述内容を分類・集計した結果、表2のようになった。多くの保護者が、実物を見たり、体験したりすることによって自らも新たな気づきを得ているようだ。例えば、「日本以外にもけんだまのようなおもちゃがあったことを初めて知った。」、「世界各国にも日本と同じような遊び道具があることを知りました。」といったものである。また、以下のように体験展示を桜美

表2 Q6の結果

記述内容の分類	記述数(人)
異文化に関する気づき	37
草の根プロジェクトに関する気づき	5
子どもに対する気づき	1
子どもの学びの場として認識	1
要望	1

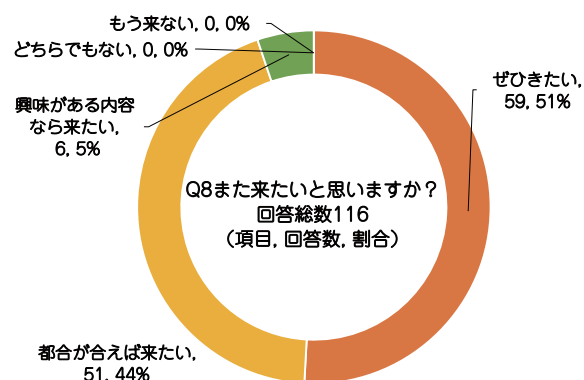


図 12 Q8 の結果

林大学の活動として認知したことに関する記述も一部に見られた。「桜美林大に国際理解教育支援プロジェクトがある事をはじめて知った。子供にこういった形で自然に国際感覚が身につけていくと理想的。」、「学生が草の根国際協力に参加しているのがすばらしい」(記述は原文のまま)といったものである。

Q7では、体験展示を通じて回答者が本プロジェクトに対してどのような印象を持ったのか尋ねた(複数回答可)。図11のグラフがその結果である。最も多く選択されたのが「親しみを感じる」、次に「普段できない体験をさせてくれる」となった。これらの選択肢は回答者の半数以上が選択している。また、「地域に貢献しようとする姿勢を感じる」、「こうした機会をもっと増やして欲しい」は共に約3割となった。割合としては少ないが、「桜美林大学の学生とコミュニケーションをとる機会となる」、「大学と接触するきっかけになる」も1割以上の回答者が選択している。

最後のQ8では、当日の体験展示でのさまざま

まな活動を受け、今後別の機会にまた来たいと思うか尋ねた。図 12 の通り、結果は「ぜひ来たい」(51%)、「都合が合えば来たい」(44%)で9割を占めた。「興味がある内容なら来たい」を合わせると全ての来場者がまた来ても良いと考えているということになる。

4. 結果の考察

以上、本プロジェクトが体験展示で実施したアンケート結果を概観してきた。これまでの経験からある程度は結果を想像できた問いもあれば、そうではない問いもあった。例えば、Q1～5は来場者の様子、あるいは直接交わした会話の記憶などから考えれば、ある程度想定することができた。しかし、今後も継続してデータ収集することで、新たな発見につなげることができるだろう。例えば、Q3の過去の参加・来場経験リピーターがどのくらい存在するのか、そして活動の経験を重ねることで、他の問いに対する回答がどのように変化するか見ることができるともかもしれない。また、Q4の告知情報を得る方法に関するデータは、広報を改善する際の参考にすることができるだろう。

一方、予想が難しかったのがQ6～8である。これまでの現場における実体験から、子どもと一緒に来た保護者も展示を楽しんでいる様子は、当たり前のものであった。しかし、アンケートを通して直接問いかけ、多くの人の声を聞いた時に、どのような反応があるのかということは、想像するしかなかった。そうした中で、Q6～8の結果は非常に心強いものであった。これらは、本プロジェクトが実施する体験展示が、地域の家庭における余暇や、余暇を通じた学びの場としての認識されているということを示していると言えるだろう。

今回のアンケートでは、予期せず出張展示に出会った人々が多数を占めた。しかし、まだ少数であると考えられるものの、本プロジェクトの活動の意義を認めるリピーターがいることも念頭に置くべきであろう。リピーターは、本プロジェクトが地域で展開するアウトリーチ教育プログラムに複合的につながっていくというこ



トルコのコマを回す様子を見守る学生(田名子どもまつりにて)

とが考えられる。そうすると、リピーターに対しては、繰り返し足を運んでも期待を裏切らないような働きかけ、展示、ミッションシート等の工夫が必要になるだろう。出張展示の内容はある程度パッケージングが完成し、環境や人手に応じて調整して実施することができる。しかし、固定化した内容を繰り返すだけでなく、体験の幅をより広く、深く促すための試行錯誤にも取り組んでいかなければならない。

本プロジェクトは多くの参加者を迎える専用施設は持たないが、地域の多様な教育現場と連携した、桜美林大学発のユニークな教育機関としてみることができるとも思われる。本プロジェクトが、桜美林大学の中にありつつも、他にはみられない学びを提供する一つの主体であるという地域からの認識は、地域社会と本学との関係性を強化すると考えられる。

今後も、出張展示をはじめとしたアウトリーチ教育プログラムにおけるアンケート調査は継続して行い、プログラムの評価や改善等に役立てていきたい。

ユニバーサル・ミュージアムを目指して ーやさしい日本語で学び合う博物館ー

清水 貴恵

エデュケーター

リベラルアーツ学群講師

1. はじめに

2016年度も多くの現場・学習者（利用者）の学びに携わらせていただいた。同時に、私たち草の根プロジェクトも支えられ、感謝の思いで振り返っている。今年度の実績の件数や概要などについては、別頁にまとめた報告を参照されたい。2017年度は、本プロジェクトにとって節目の年である。本稿では20周年を前に、今年度を振り返りつつ、現在の本プロジェクトの教育的な意義や可能性を博物館教育という視点から考察してみたい。

2. 博物館とは

資料（もの）があり、それを置く施設（ところ）があり、利用者と利用者の学びを支える学芸員やスタッフ（ひと）がいる。それが博物館である。博物館を構成するこの三要素が本プロジェクトにも存在する。つまり、本プロジェクトには博物館的な機能があり、その役割を果たしていると言える。

博物館は社会教育の施設である。すなわち、あらゆる人々に開かれた場である。本プロジェクトの支援対象（現場）は学内にとどまらない。学外の学校教育や社会教育、共生・協働のまちづくりに取り組む市民の活動など、活動の場は多岐に渡る。本プロジェクトはさまざまな現場

や人に対し、私たちの持つリソース（ヒトやモノ、そしてチエ・ワザ）をそれぞれのニーズにあわせて提供している。

生涯学習社会の今日、博物館は「生涯学習施設」とも呼ばれる。人は自らが望むあり方や生き方を求め、絶えず学ぶものである。そのような人間らしい生き方というものが生涯学習の根幹である。博物館は、人々の生涯学習の実現を支える場の一つである。そして、生涯学習社会の醸成・成熟という大きな役割を担っている。博物館的な機能を持つ本プロジェクトもまた、人々や地域社会の生涯学習を後押しする存在であると考えている。

3. ユニバーサル・ミュージアム

近年、「ユニバーサル・ミュージアム」という言葉を耳にする。これは、障害のある人や高齢者にも利用しやすい施設・設備の設計がなされた、いわゆる「バリアフリー」という語で認識される概念とは少し異なる。博物館での活動そのものにもバリア（障害、障壁、不自由さ）があり、それを取り除くことで「だれもが楽しみ学ぶことができる博物館」を目指そうというのがユニバーサル・ミュージアムである。

博物館の多くは、「見える」ことが前提の展示手法（資料を見る、解説を読む）が一般的である。しかし、視覚に不自由がある人であって

も、ハンズオン（手にとって触れることができる）展示の資料に「触れる」ことで、ものから情報を読み取ることができる。また、解説を読んで理解することが難しい人たち（解説言語を獲得・習得していない子どもや非母語話者、読み書きの障害を抱える人など）の博物館利用と自由な学びを後押しする。

もの（資料）に触れる観察方法「触察」の有効性は、ユニバーサル・ミュージアムの具現化の鍵となっている。そして、「開かれた学びの場」、「生涯学習を支える場」の真の実現という意味においても、非常に大きな意義と可能性を持っている。本プロジェクトは、こうしたハンズオンで利用可能な実物資料を保持しており、それらを体験重視の展示で活用するアウトリーチ教育活動は、ユニバーサル・ミュージアムを地域の中で実現する試みと言えるだろう。

4. ユニバーサルな学びの場

社会は多様な人々で構成されている。人はもちろん、物事のあり方も多様性に富んでいる。その多様化は急速に、そして複雑化しながら進み続けている。私たちの生きる今日は、地球規模で日々刻々と激しく変化しているのである。このような社会であるからこそ、生涯学習施設である博物館は、人々に等しく開かれた学びの場でなければならない。あらゆる人々の学びや自己実現を支えるという役割は、今後ますます求められていくであろう。

改めて身のまわりに目を向けてみると、実にいろいろな人がいること、そして共に集団や社会を成していることに気づく。年齢・年代、性やジェンダー、出身・国籍、言語、価値観や思想、社会的な立場・役割、障害や特性など、自分という一人の人間を形成する要素は多様かつ複雑であり、一人一人異なる。人の多様性に改めて気づくと、人の学びやその学び方もそれぞれだと理解できる。

人間にはみな「マルチ能力」(Multiple Intelligences) が存在している。ただし、その一つ一つの能力の発達のしかたや度合い、能力の活用のしかたは、人によって異なる。ハワー



老若男女問わず、初めて出会った外国のゲームを一緒に楽しむ。
(2016年12月3日 大野中公民館まつりにて)

ド・ガードナー (H. Gardner) が唱えたこの学習理論 (MI 理論) は、人の学びの多様性を裏づけるものである。

学校教育のようなフォーマルな教育現場 (学びの場) において、学習者に求められることの多くは、言語 (聴く・読む) を通して物事を理解すること、自身の考えや思いを言語 (話す・書く) で表現することである。本来、人が何かを学ぶ際に使う力は、言語だけではない。さまざまな力を総動員し、組み合わせながら学びに取り組んでいる。しかし、フォーマルな学習環境においては、圧倒的に言語に頼った学習活動が多く、その結果 (成果) が評価されることが一般的である。学習者それぞれにフィットする学びづくりを実現することは、フォーマルな学びの場・機会では極めて難しい。

一方、博物館は自由な学びの場である。MI 理論にもとづいて考えると、フォーマルな現場にくらべて人々の多様な学びに応えられる。特に、ハンズオン展示の場合、それぞれ自由に行う体験活動がその人の心を揺り動かす。そこから、関心や興味が膨らんだり、新たな疑問や課題が生じたり、経験や知識と照らし合わされた

り、自分なりの意味や答えが見出されたりする。資料に触れた人の心と頭の中では、いくつもの知的な刺激や欲求が沸き起こるのである。

つまり、自身の五感、特に自ら「触れる」ことを通じて得られる博物館での体験は、利用者を単なる来館者（visitor）から能動的な学習者（learner）へと変容させると言える。このことは、本プロジェクトとして取り組んできた出張博物館や数々のワークショップなどの実践を通じ、私たち自身も強く実感していることである。

5. 草の根プロジェクトの意義と可能性

本プロジェクトは、アウトリーチという方法で開かれた学びの場をつくり、多くの人の生涯学習を支えていると考えている。別頁の報告のとおり、今年度も多くの現場から要請を受け、それぞれの目的や対象などに応じたアウトリーチ教育活動を行った。どの現場においても、対象となる利用者・来場者（学習者）は非常に多様で、その楽しみ方（学び方）もさまざまである。このように、多様な人々が多様な方法で楽しみ、学ぶ、ユニバーサル・ミュージアム的な観点で2016年度の活動を振り返った時、特に印象的なエピソードがある。それは、来日して間もない日本語学習を始めたばかりの子どもとその保護者の姿である。この子どもは、言語・文化的マイノリティであるがゆえ、学校でのさまざまな場面において、主体的に思考したり表現したりすることが難しい状況にある。しかし、私たちの出張博物館では自らが活動の主体となり、自らの手でこまやけん玉に触れ、夢中になって試行錯誤して遊んでいた。母語も日本語力も異なる留学生とふれあう様子も見られた。

そして、その両親も母国の文化について、母語ではない英語や不慣れな日本語を駆使しながら生き生きと話してくれた。子どもたちが着られなくなった民族服を寄付したいとも申し出てくれた。子どもの就学と同時に、親もまた学校文化の違いに日々遭遇し、教師（学校）との異文化コミュニケーションに苦勞する。たいていの場合、教師（学校）と外国につながる保護者は、「教える／教えられる」「指示する／従う」

といった関係性になる。主体的に学校教育に参加したり、発言・発信したりすることは、母国にいる時のように容易にはできない。この保護者にとっても、日頃の学校教育との関係性とは違った形で、私たちの開いた場・機会に参加することができたのではないだろうか。

また、ある小学校の授業で出会った、外国につながる子どもたちも印象に残っている。一見すると、本人や周囲には困った様子や問題はなさそうである。しかし、自身の母国（ルーツ）について積極的に発信する機会がない子どもは少なくなく、窮屈な思いをしている場合もある。私たちの世界各地のこまを使ったワークショップで、母国のこまを発見した子どもが「これ、ぼくの国！ぼく、〇〇人だよ！」と、なんとも嬉しそうに何度も繰り返して話してくれた。

このような学習者に出会うと、多様な学習者の多様な学びを支える大切さと必要性を実感する。それと共に、本プロジェクトのユニバーサル・ミュージアムとしての可能性を認識する。それは、資料を実際に手に取り、触察したり体験したりするハンズオン展示を活用した学びづくりを実践しているからである。ただし、体験重視の学習活動の有効性をより高め、その可能性をさらに広げるには、もう一つのリソースである「ヒト」の存在が必要不可欠である。ハンズオン資料と学習者、そして学習者と知をつなげるのが、筆者らエデュケーターであり、共に活動を支える留学生を含む学生たちである。

では、ユニバーサルな学びとは、何をどのようにすれば実現できるのだろうか。本プロジェクトが、具体的にどのような取り組みを行えば、より広く多くの人々が楽しみ、学べる場・機会を提供できるだろうか。

6. 「やさしい日本語」

「やさしい日本語」これは、日本国内に暮らす外国人（日本語を母語としない人々）にとっても「易しく（わかりやすい）優しい（親切的な）日本語」のことである。

阪神・淡路大震災では、日本人だけでなく多くの外国人も被災した。日本語が理解できない



ベトナム人留学生が外国籍の子どもにインドネシアのコマの回し方を教える。(2016年10月12日さがみはら国際交流フェスティバルにて)

ことが要因となり、被災してさらに苦しい状況に置かれた滞日外国人が非常に多かったと言われている。このことがきっかけで「やさしい日本語」研究が始まった。

現在、「やさしい日本語」は災害時のみならず、平時の情報提供手段としても必要であるという研究も進められている。今日の日本社会は、外国につながる多様な背景の人々に大きく支えられている。彼らと日本人（日本語母語話者）の共生・協働は不可欠で、両者をつなぐ共通言語が「やさしい日本語」であると考えられている。

日本語が母語であっても、幼い子どもから高齢者まで、年齢や発達段階の異なる人々がいるし、読み書きに困難を抱える人もいる。また、日本語で簡単な挨拶や会話くらいはできても、それ以外（以上）のことは通訳や翻訳などの助けが必要な人も少なくない。このようなコミュニケーション上の多様性を掘り下げてみると、日本語が母語であるかどうかに関わらず、「やさしい日本語」はみんなに「易しく」「優しい」コミュニケーションの道具となる。

「やさしい日本語」で情報発信に取り組む自治体や地域社会は、徐々に増え始めている。NHKは「やさしい日本語ニュース」をオンラインで配信している。それは、母語に関わらず、広く青少年にも理解しやすいものである。3年後にオリンピック・パラリンピック大会を開催する東京都は、「東京2020大会後のレガシー

として『多文化共生社会の実現』を見据えて取り組む上で、多言語対応の一つの手段として『やさしい日本語』を広める」としている。

このような取り組み事例から考えると、あらゆる人に開かれた社会教育施設においても「やさしい日本語」の導入・普及が望ましい。コミュニケーション（言語・非言語あらゆるものを含む）は、これからのユニバーサル・ミュージアムをつくるうえで重要な柱となるであろう。冒頭でも述べたとおり、博物館は「ひと」（学習者とそれを支えるスタッフ）がいてこそ博物館である。「やさしい日本語」は、多様な人々の多様な学びを支える博物館のユニバーサル・コミュニケーションの手段「みんなのことば」になるだろう。

7. 多様性を真に理解した心が行き届く人

「自分のあたり前はみんなのあたり前？」これは、本プロジェクトが学習活動のテーマとして軸に据え、子どもたちや現場関係者に伝えていることである。また、これとあわせて「聴く」ことを意識するような学びづくりを行っている。自らの力を総動員して他者や状況を読み取ることがねらいである。

そのためには、まず、本プロジェクトの一人一人が人や物事の多様性を真に理解しようと努める人間でありたい。常日頃より自分の考え方やものの見方にとらわれず、他者や周囲の物事

に関心を持って耳を傾ける態度や力を磨かねばならない。

このことを念頭に、今年度は学生メンバーへ「やさしい日本語」研修を行った。地域で子どもたちを対象にワークショップを実施するにあたり、自らの言葉に意識するよう指導した。どのような語彙や表現を使うか、適当な文構造か、言語以外の工夫をどうするか。まず、自分たちが現場で話すことばを具体的に文字化することを徹底させた。この取り組みは、彼らにとって他者を意識し、言葉を吟味する姿勢やその力の大切さを理解する機会になったと思われる。しかし、事後の振り返りをみると、残念ながら「やさしい日本語」に注目し、改めて言及するコメントは見られなかった。このことから、この「やさしい日本語」研修は、2017年度以降も継続して取り組むべき課題であると考えている。

本プロジェクトの一員として活動する学生は、国籍や言語、学内での所属や立場などの背景を問わず、私たちの貴重な人的リソースである。繰り返しになるが、博物館は「ひと」がいてこそ博物館である。学生は多様性の理解や協働を学ぶための生きたリソースであると同時に、利用者が積極的に資料に触れ、能動的に自由な学びへと歩みを進めるファシリテーターの役割も果たしている。国内の大学博物館はもちろん、公共の博物館をみても、私たちのようなハンズオンで公開する博物館は他に類を見ないが、さらに付加価値を与えるのが学生たちだと考えている。学生一人一人が聴く力を伸ばし、さまざまな人や物事に対して行き届いた人材となってほしいと期待している。本プロジェクトのさらなる発展は、彼（女）らの成長に大きくかかっているからである。そう言っても決して過言ではない。

8. おわりに

博物館という生涯学習の場は、人と人、人と知をつなぐ場である。私たち草の根プロジェクトもそうありたいと日々努力を重ねている。だれもが楽しみ、学べる、真に開かれたユニバーサル・ミュージアムとして、人々や地域の中に

存在するためには、コミュニケーションのあり方もユニバーサルでなければならない。私たちが「国際理解教育のために力を尽くしていこう」と立ち上がり20年になる。国際理解教育の目指すことが「人や物事の多様性を真に理解し、他者と共生・協働（しよう）できる人を育てること」であるならば、本プロジェクトはユニバーサルな学びを生み出す「やさしい博物館」として発展することで、これからも国際理解教育のために努力を続けていきたい。

【参考文献・web サイト】

庵功雄（2015）「やさしい日本語」研究が日本語母語話者にとって持つ意義－「やさしい日本語」は外国人のためだけのものではない－『一橋大学国際教育センター紀要』6巻、一橋大学国際教育センター

庵功雄（2015）「「やさしい日本語」研究の「これまで」と「これから」」『ことばと文字』4巻、日本のローマ字社

ティム・コールドトン（著）／染川香澄ほか（訳）『ハンズ・オンとこれからの博物館－インタラクティブ系博物館・科学館に学ぶ理念と経営』東海大学出版会

東京都オリンピック・パラリンピック準備局
<https://www.2020games.metro.tokyo.jp/multilingual/references/easyjpn.html>

トーマス・アームストロング（著）／吉田新一郎（訳）『マルチ能力が育む子どもの生きる力』小学館

NHK NEWS WEB EASY（やさしい日本語ニュース）

<http://www3.nhk.or.jp/news/easy/>

浜田弘明（2014）「博物館概論」『博物館の理論と教育』朝倉書店

弘前大学人文学部社会言語学研究室

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/index.html>

アウトリーチ教育プログラムによる ワークショップ・出張展示の実施概要



世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム「世界の学校」(高学年)
2016年7月23日(土) 桜美林大学 第二国際寮にて

日時

2016年4月3日(日) 10:00～16:00

活動名称

町田市さくらまつりにおける世界の遊び道具の出張展示

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(イベント)

会場

町田市芹ヶ谷公園

連携・協力先

町田市さくらまつり実行委員会

参加者

428名

実施メンバー

エドゥケーター:岩本・清水 / 学生:金澤・兼田・戸谷 / 卒業生:櫻井

実施内容

世界のコマ・けん玉・テーブルゲームのハンズオン展示を出展。世界の遊び道具を体験する機会を提供した。



日時

2016年5月12日(木) 16:10～17:40

活動名称

リベラルアーツ学群リベラルアーツセミナー
オプションワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

桜美林大学 其中館

連携・協力先

金子淳先生(リベラルアーツ学群)

参加者

12名(大学1年生)

実施メンバー

エドゥケーター:岩本

実施内容

新入生対象の授業の中で、学生相互のコミュニケーションを促しつつ、文化の多様性や批判的思考について学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年5月15日(日) 10:00～16:00

活動名称

第3回相模台インターナショナルフェスタにおける世界の遊び道具の出張展示

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(イベント)

会場

相模原市南台公園

連携・協力先

相模台インターナショナルフェスタ実行委員会

参加者

412名

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：クイン・金澤・ツォモ・戸谷 / 卒業生：廣田

実施内容

世界のコマ・けん玉・テーブルゲームのハンズオン展示を出展。世界の遊び道具を体験する機会を提供した。



日時

2016年5月16日(月) 16:10～17:10

活動名称

リベラルアーツ学群リベラルアーツセミナー
オプションワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

桜美林大学 荊冠堂内小礼拝堂

連携・協力先

鷹木恵子先生(リベラルアーツ学群)

参加者

12名(大学1年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水

実施内容

新入生対象の授業の中で、学生相互のコミュニケーションを促しつつ、文化の多様性や批判的思考について学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年5月25日(水) 13:00～14:15

活動名称

神奈川県立相原高校総合ビジネス科(3年生)
を対象とした留学生との交流ワークショップ

実施したプログラム

国際学生訪問授業プログラム

会場

桜美林大学 荊冠堂内小礼拝堂

連携・協力先

相原高校総合ビジネス科

参加者

38名(高校3年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：クイン・
呉・ジェyson・ソロンゴ・ナムナ・楊

実施内容

高校生に自らのキャリアを考える新たな視点を
提供することをねらいとして、留学生のライフ
ヒストリーを伝えるワークショップを実施した。



日時

2016年5月26日(木) 16:10～17:40

活動名称

リベラルアーツ学群リベラルアーツセミナー
オプションワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

桜美林大学 荊冠堂内小礼拝堂

連携・協力先

井上直子先生(桜美林大学リベラルアーツ学群)

参加者

12名(大学1年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水

実施内容

新入生対象の授業の中で、学生相互のコミュニ
ケーションを促しつつ、文化の多様性や批判的
思考について学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年6月3日（金）9:00～10:30

活動名称

リベラルアーツ学群「生涯学習概論」における
ワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

桜美林大学 荊冠堂内小礼拝堂

連携・協力先

清水貴恵先生（リベラルアーツ学群）

参加者

40名（大学1～4年生）

実施メンバー

エドゥケーター：岩本

実施内容

学習方法の一つとして「ワークショップ」の事例を示しつつ、学生に実体験する機会を提供するため、実物を活用したワークショップを実施した。



日時

2016年6月18日（土）14:00～16:00

活動名称

武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニア①

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)
国際学生訪問授業プログラム

会場

武蔵野プレイス（武蔵野市）

連携・協力先

武蔵野市生涯学習事業団

参加者

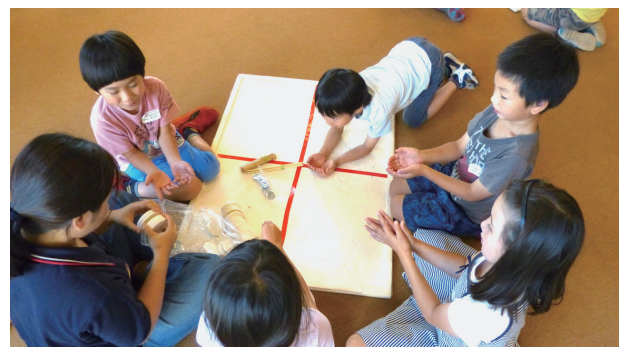
23名（小学1～3年生）

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：クイン・西郷・ジェイソン・ソロンゴ・戸谷・ナムナ・楊

実施内容

子どもたちが留学生と共に実物資料を体験する活動に取り組むことで、他者の声に耳を傾け協働することを学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年6月29日(水) 9:00～11:30

活動名称

町田市立忠生小学校4年生対象の留学生との交流ワークショップ

実施したプログラム

国際学生訪問授業プログラム

会場

町田市立忠生小学校

連携・協力先

町田市立忠生小学校4年生

参加者

100名

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：クイン・ソロンゴ・ナムナ・楊

実施内容

他者の声に耳を傾け協働することを、留学生からの自己紹介やクイズ等の全員が参加する活動を通じて学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年7月13日(水) 14:30～16:00

活動名称

リベラルアーツ学群「博物館教育論」におけるワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

桜美林大学 待望館

連携・協力先

石渡尊子先生(健康福祉学群)

参加者

40名

実施メンバー

エドゥケーター：岩本

実施内容

学内における博学連携の実例として、本プロジェクトの事業を紹介し、ワークショップの内容は学生を対象に実践することで紹介した。



日時

2016年7月16日(土) 14:00～16:00

活動名称

武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニア②

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)
国際学生訪問授業プログラム

会場

武蔵野プレイス(武蔵野市)

連携・協力先

武蔵野市生涯学習事業団

参加者

24名(小学1～3年生)

実施メンバー

エドゥケーター:岩本・清水 / 学生:金澤・クイン・西郷・ソロンゴ・ツォモ・戸谷・ナムナ

実施内容

子どもたちが留学生と共に実物資料を体験する活動に取り組むことで、他者の声に耳を傾け協働することを学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年7月18日(祝) 10:00～16:00

活動名称

体験する文化祭(相模原市中央区)におけるワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)
国際学生訪問授業プログラム

会場

相模原市立産業会館

連携・協力先

中央区安全・安心と夢・希望のプロジェクト

参加者

47名(小学生)

実施メンバー

エドゥケーター:岩本・清水 / 学生:金澤・兼田・クイン・呉・西郷・ツォモ・戸谷

実施内容

留学生と日本人学生の混成グループが、コマの触察や回し方を考えるゲームを通じて、文化の多様性を学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年7月23日(土) 10:00～12:00

活動名称

世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム
「世界の学校」(低学年)

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)
国際学生訪問授業プログラム

会場

桜美林大学第二国際寮

連携・協力先

相模原市教育委員会後援

参加者

16名(小学1～3年生)

実施メンバー

エドゥケーター:岩本・清水/学生:郭・金澤・
クイン・西郷・ソロンゴ・チャン・戸谷・ナムナ/
卒業生:アン

実施内容

子どもたちが留学生と共に実物資料を体験する活動に取り組むことで、他者の声に耳を傾け協働することを学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年7月23日(土) 14:00～16:00

活動名称

世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム
「世界の学校」(低学年)

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)
国際学生訪問授業プログラム

会場

桜美林大学第二国際寮

連携・協力先

相模原市教育委員会後援

参加者

10名(小学4～6年生)

実施メンバー

エドゥケーター:岩本・清水/学生:郭・金澤・
クイン・西郷・ソロンゴ・ツォモ・チャン・戸谷・
ナムナ/卒業生:アン

実施内容

子どもたちが留学生と共に実物資料を体験する活動に取り組むことで、他者の声に耳を傾け協働することを学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年7月25日(月) 9:00～10:00

活動名称

相模原市立向陽小学校サマースクール(低学年)
におけるワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

相模原市立向陽小学校

連携・協力先

相模原市立向陽小学校

参加者

26名(小学1～3年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水

実施内容

世界のコマとけん玉を使用したワークショップ。世界の多種多様なコマの回し方を考えるゲームや自由に実物で遊びを体験した。



日時

2016年7月25日(月) 10:40～12:00

活動名称

相模原市立向陽小学校サマースクール(高学年)
におけるワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

相模原市立向陽小学校

連携・協力先

相模原市立向陽小学校

参加者

26名(小学4～6年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水

実施内容

ネパールの「へびとはしご」、韓国の「ユンノリ」の遊び方を紹介し、実物で体験するワークショップを実施した。



日時

2016年7月26日(火) 13:00～15:00

活動名称

青少年おもてなしカレッジ in 田名公民館
(基礎編)におけるワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

相模原市立田名公民館

連携・協力先

相模原市立田名公民館

参加者

24名(小学4～6年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：西郷

実施内容

グループで協働的に行うアクティビティとして、世界のコマの触察ゲーム、ブラジルのけん玉の工作を行うワークショップを実施した。



日時

2016年8月4日(木) 16:10～17:40

活動名称

健康福祉学群「遊びと生活」におけるワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

桜美林大学 サレンバーガー館

連携・協力先

福田きよみ先生(健康福祉学群)

参加者

14名(大学1～4年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本

実施内容

世界の実物資料を活用した体験活動の事例紹介を目的として、世界のコマや箸を使用したワークショップを実施した。



日時

2016年8月25日(木) 9:00～11:00

活動名称

町田市立忠生小学校サマースクールにおける
ワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

町田市立忠生小学校

連携・協力先

町田市立忠生小学校

参加者

26名(小学1～6年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水

実施内容

世界各国で親しまれているボードゲームとして、「マンカラ」の遊び方を紹介、参加者が実物で遊んだ後、各自ボードを工作した。



日時

2016年9月15日(月) 10:40～12:15

活動名称

相模原市立くぬぎ台小学校6年生対象の
ワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

相模原市立くぬぎ台小学校

連携・協力先

相模原市立くぬぎ台小学校

参加者

63名(6年生×2クラス)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：兼田・西郷

実施内容

文化の多様性への気づきを促すことを目的として、世界の箸とインドネシアのアンクルンを活用したワークショップを実施した。



日時

2016年10月2日(日) 10:00～16:00

活動名称

第20回さがみはら国際交流フェスティバルにおける出張展示

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(イベント)
国際学生訪問授業プログラム

会場

桜美林大学 第二国際寮

連携・協力先

さがみはら国際交流ラウンジ

参加者

230名

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：カオ・金澤・兼田・クイン・呉・西郷・ツォモ・戸谷・リン

実施内容

世界のコマ・けん玉・テーブルゲーム・民族服・帽子のハンズオン展示し、参加者が自由に体験する機会を提供した。



日時

2016年10月16日(木) 10:00～16:00

活動名称

第3回ユニコムプラザさがみはらまちづくりフェスタにおけるワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)
国際学生訪問授業プログラム

会場

ユニコムプラザさがみはら

連携・協力先

ユニコムプラザさがみはら

参加者

34名

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：金澤・クイン・呉・西郷・ツォモ・戸谷

実施内容

世界各国で親しまれているボードゲームとして、「マンカラ」の遊び方を紹介し、参加者が実物で遊んだ後、各自がボードを工作した。



日時

2016年10月26日(木) 14:50～15:35

活動名称

相模原市立谷口台小学校国際理解クラブ対象のワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

相模原市立谷口台小学校

連携・協力先

相模原市立谷口台小学校

参加者

18名

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：兼田・西郷

実施内容

世界各国で親しまれているボードゲームとして、「マンカラ」の遊び方を紹介し、体験するワークショップ実施した。



日時

2016年11月16日(水) 10:15～11:00

活動名称

町田市立木曽境川小学校3年生対象のワークショップ

実施したプログラム

国際学生訪問授業プログラム

会場

町田市立木曽境川小学校

連携・協力先

町田市立木曽境川小学校

参加者

90名(3年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：ニエン・リン

実施内容

他者の声に耳を傾け協働することを、留学生からの自己紹介やクイズ等の全員が参加する活動を通じて学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年11月16日(水) 11:10～11:55

活動名称

町田市立木曽境川小学校4年生対象の
ワークショップ

実施したプログラム

国際学生訪問授業プログラム

会場

町田市立木曽境川小学校

連携・協力先

町田市立木曽境川小学校

参加者

57名(4年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本 / 学生：ツォモ・ニエン・リン

実施内容

他者の声に耳を傾け協働することを、留学生からの自己紹介やクイズ等の全員が参加する活動を通じて学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年11月18日(金) 14:30～16:00

活動名称

リベラルアーツ学群「生涯学習概論」における
ワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

荊冠堂内小礼拝堂

連携・協力先

清水貴恵先生(リベラルアーツ学群)

参加者

49名(大学1～4年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本

実施内容

学習方法の一つとして「ワークショップ」の事例を示しつつ、学生に実体験する機会を提供するため、実物を活用したワークショップを実施した。



日時

2016年11月26日(土) 11:00～11:50

活動名称

青梅市教育委員会国際理解講座における
ワークショップ

実施したプログラム

国際学生訪問授業プログラム

会場

青梅市社会福祉会館

連携・協力先

青梅市教育委員会

参加者

31名(小学校5年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：ツォモ・
ニエン・リン

実施内容

他者と協働することを、留学生からの自己紹介
やクイズ、実物資料を使った活動等の全員が参
加する活動で学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年11月26日(土) 13:30～14:20

活動名称

青梅市教育委員会国際理解講座における
ワークショップ

実施したプログラム

国際学生訪問授業プログラム

会場

青梅市社会福祉会館

連携・協力先

青梅市教育委員会

参加者

31名(小学6年生～高校1年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：ツォモ・
ニエン・リン

実施内容

他者と協働することを、留学生からの自己紹介
やクイズ、実物資料を使った活動等の全員が参
加する活動で学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年12月3日(土) 13:00～15:30

活動名称

パルテノン多摩キッズファクトリーにおける
ワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

パルテノン多摩キッズファクトリー

連携・協力先

パルテノン多摩

参加者

7名(小学生)とその保護者

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：金澤・戸谷

実施内容

楽器をテーマにしたワークショップ。普段目にする
ことが少ない楽器の音や形に注目するゲーム
や合奏の後、弦楽器を工作した。



日時

2016年12月4日(日) 10:00～15:00

活動名称

第29回大野中公民館まつりにおける世界の遊
び道具と民族服の出張展示

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(イベント)

会場

相模原市立大野中公民館

連携・協力先

相模原市立大野中公民館

参加者

91名

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：西郷・ツオ
モ / 卒業生：廣田

実施内容

世界のけん玉・テーブルゲーム・民族服・帽子
のハンズオン展示を出展し、参加者が自由に体
験する機会を提供した。



日時

2016年12月7日(水) 13:30～14:20

活動名称

町田市立武蔵岡中学校全校生徒対象のワークショップ

実施したプログラム

国際学生訪問授業プログラム

会場

町田市立武蔵岡中学校

連携・協力先

町田市立武蔵岡中学校

参加者

75名(中学1～3年生)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：ツォモ・ニェン・リン

実施内容

他者と協働することを、留学生からの自己紹介やクイズ、実物資料を使った活動等の全員が参加する活動で学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年12月10日(日) 13:30～15:15

活動名称

青少年おもてなしカレッジ in 田名(中級編)におけるワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)
国際学生訪問授業プログラム

会場

相模原市立田名公民館

連携・協力先

相模原市立田名公民館

参加者

18名

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：金澤・呉・西郷・ツォモ・戸谷・リン

実施内容

子どもたちが留学生と共に実物資料を体験する活動に取り組むことで、他者の声に耳を傾け協働することを学ぶワークショップを実施した。



日時

2016年12月16日(金) 10:40～12:10

活動名称

リベラルアーツ学群「博物館教育論」における
ワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

桜美林大学 明々館

連携・協力先

石渡尊子先生(健康福祉学群)

参加者

90名(大学1～4年生)

実施メンバー

エドゥケーター:岩本

実施内容

学内における博学連携の実例として、本プロジェクトの事業を紹介し、ワークショップの内容は学生を対象に実践することで紹介した。



日時

2017年1月22日(日) 10:25～12:30

活動名称

第32回橋本子どもまつりにおける世界の遊び
道具と民族服の出張展示

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(イベント)

会場

相模原市立男女協働参画推進センター
(ソレイユさがみ)

連携・協力先

ソレイユさがみ・相模原市立橋本公民館

参加者

415名

実施メンバー

エドゥケーター:岩本・清水 / 学生:長田・兼田・
金澤・呉・後藤・椎橋・ツオモ・山中・リン

実施内容

世界のコマ・けん玉・テーブルゲーム・民族服・
帽子のハンズオン展示を出展し、参加者が自由に
体験する機会を提供した。



日時

2017年1月25日(水) 10:45～12:20

活動名称

相模原市立富士見小学校1年生対象の
ワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

相模原市立富士見小学校

連携・協力先

相模原市立富士見小学校

参加者

129名(1年生5クラス)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：兼田・西郷

実施内容

生活科目の「昔遊び」に合わせ、多種多様なコマの回し方を通して、楽しみながら文化の多様性に触れるワークショップを実施した。



日時

2017年1月27日(金) 10:45～12:20

活動名称

相模原市立富士見小学校3年生対象の
ワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

相模原市立富士見小学校

連携・協力先

相模原市立富士見小学校

参加者

98名(3年生3クラス)

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水

実施内容

国際理解につながる体験的な学習として、世界各国の多種多様なコマの回し方をグループで協力して考えるワークショップを実施した。



日時

2017年2月24日（金）9:35～11:25

活動名称

町田市立山崎小学校6年生対象の
ワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム（ワークショップ）

会場

町田市立山崎小学校

連携・協力先

町田市立山崎小学校

参加者

55名（6年生2クラス）

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水

実施内容

総合的な学習の活動として、世界各国の多種多様な楽器を活用したワークショップを実施した。



日時

2016年2月26日（日）10:00～16:00

活動名称

第21回小田原地球市民フェスタにおける
世界の遊び道具と民族服の出張展示

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム（イベント）
国際学生訪問授業プログラム

会場

川東タウンセンターマロニエ

連携・協力先

小田原地球市民フェスタ実行委員会

参加者

220名

実施メンバー

エドゥケーター：岩本・清水 / 学生：金澤・呉・
山中・リン

実施内容

世界のけん玉・テーブルゲーム・民族服・帽子のハンズオン展示を出展。参加者が自由に体験する機会を提供した。



日時

2017年3月5日(日) 10:00～15:00

活動名称

第21回田名子どもまつりにおける世界の遊び
道具と民族服の出張展示

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(イベント)

会場

相模原市立田名公民館

連携・協力先

相模原市立田名公民館

参加者

311名

実施メンバー

エドゥケーター:岩本・清水 / 学生:長田・小沢・
後藤・西郷・椎橋・山中

実施内容

世界のコマ・けん玉・テーブルゲーム・民族服・
帽子のハンズオン展示を出展。参加者が自由に
体験する機会を提供した。



日時

2016年3月15日(水) 9:00～10:30

活動名称

相模原市立富士見台小学校2年生対象の
ワークショップ

実施したプログラム

国際理解教育出張プログラム(ワークショップ)

会場

相模原市立富士見小学校

連携・協力先

相模原市立富士見小学校

参加者

151名(2年生5クラス)

実施メンバー

エドゥケーター:清水

実施内容

国語科で取り上げられている「スーホの白い馬」
に合わせ、モンゴルについて理解を深めるワー
クショップを実物資料を活用して実施した。



西郷 菜奈美さん

リベラルアーツ学群

アウトリーチ教育プログラム

参加回数 通算 50 回

2014 年度秋学期～ 2016 年度秋学期



私は、大学2年生の春学期に博物館教育論(石渡尊子先生)を受講し、その中で草の根プロジェクトのことを知りました。そこで、日本にもある遊び道具が実は世界各国にも存在することや、日本のものとは違う形をしていることに驚きました。そういった世界の多様性を学生スタッフとして子どもたちに伝えたいと思い、草の根プロジェクトの活動に参加しました。

約2年間の活動を通して、特に印象に残っていることは2016年度の活動で、学生スタッフでチームに分かれて、実際の子どもの相手にしたワークショップの中で話す言葉や動きなどを考えたことです。

私は3年生の時に小学生を対象としたワークショップを企画・実施する学芸員課程の実習を行いました。しかし、その経験があっても、言葉で伝えることはとても難しいと感じました。普段私たちが話している言葉は、同世代の相手に使うものであり、そのまま普段のように話しては子どもには伝わりづらいため、言葉の選び方にはとても悩みました。自分を中心に考える

卒業生によるエッセイ

「私が草の根プロジェクトで 得たもの」



兼田 舞さん

ビジネスマネジメント学群

アウトリーチ教育プログラム

参加回数 通算 16 回

2015 年度春学期～ 2016 年度秋学期

私が草の根国際理解教育支援プロジェクトで活動することになったきっかけは、清水先生に声をかけていただいたことです。学芸員課程の授業にある生涯学習概論の講義で初めて先生に出会いました。当時、生涯学習概論の講義は一方的に話を聞くものだけでなく、グループを作って工作したり考えたりする活動的なものがたくさんありました。そこでの私の活動やレポートから私の心情を組みとり、清水先生が声をかけてくださったそうです。漠然とボランティア活動をしたいと思っていた私は、そのお誘いを受けることにしました。これが、私と草の根プロジェクトの出会いです。

1年半の活動の中で、私が印象に残っていることは、草の根プロジェクトの学生スタッフだけで活動を考え、子どもたちが世界のコマで遊ぶという活動です。いつもの活動では、エドゥケーターである清水先生と岩本先生が活動の流れを考えてくださり、そのプログラムにしたがって動いていました。しかし、その活動は2つの学生チームに分かれて、それぞれ台本作

のではなく、客観的に考えるということを実習の中で清水先生に教えていただきました。

この草の根プロジェクトの活動でも「自分が子どもだったら」と考え、どうしたら伝わるか、他の学生スタッフや先生方の考えを取り入れ、話し方を変えていきました。そうすると、少しずつ子どもたちへ伝わるようになり、ワークショップに参加する子どもたちともさらに話せるようになりました。また、本番では緊張することもありましたが、チームの皆さんがいたからか、少し余裕も出てきて、楽しく活動を進めることができました。

草の根プロジェクトに参加して得たことは、やはり「伝える」ということだと考えています。誰にでも分かりやすく伝えるにはどうすればよいか、言葉以外にジェスチャーなどの身振り手振りをどう上手く使っていくかなどを学ぶことができました。また、活動を始める前から興味があった異文化理解についても、実際に活動を始めてからモノやその文化、人に触れてみて、さらに考えることができるようになりました。

自分が当たり前だと思っていることも、他の人からすれば違う文化であるということ意識するようになりました。

さまざまな子どもたちや留学生、先生方と関わり、多くの発見や知識を得ることができました。私自身、力不足なところも多く、皆さんにご迷惑をおかけするところも多々ありましたが、この2年間を通して少しずつ成長できたのではないかと考えています。普通の大学生活を送るだけでは体験できない貴重な経験となりました。草の根プロジェクトに参加して、とてもよかったと思います。先生方、学生スタッフの皆さん、本当にありがとうございます。この経験から得たこと、嬉しかったことなどを今後、社会人として生かしていきたいと思っています。

り、実際にお祭り（相模原市中央区「体験する文化祭」）で活動するというものでした。初めて学生だけで試行錯誤して考えたり、本番通りのセリフを書き出したりしたので、以前よりもさらに頭を使った気がしました。さらに、他の活動との違いとして、本番当日だけでなく、事前準備にそれまで以上に熱心に取り組んだと思います。より主体的に動いた活動であっただけに、一番印象に残っています。

もう一つは、毎年行われる相模原市立橋本公民館の子どもまつりです。私は二度経験しましたが、草の根プロジェクトで経験した活動の中で一番忙しく感じるのがこの日でした。コマやけん玉、ボードゲームなど世界中の遊び道具で遊んだり、民族服や帽子を身につけて写真を撮ったりすることができる楽しいお祭りです。子どもたちだけでなく、私自身もいつも楽しみながら活動に臨んでしました。

一方で、沢山の人が入り出すため、休む暇もなく、常に周りを見て、気を張っておくことはとても大変なことでした。しかし、活動を終

えた後の達成感はその分大きいものでした。

私が草の根プロジェクトで得たものは、学びを提供する私たちは、あくまで「きっかけ作り」という役割に過ぎないということです。子どもたちに新しい知識を身につけさせるわけでもなく、強制的に学習習慣を身につけさせるわけでもありません。何かを知りたいと思うことや何か心動かされるその瞬間に子どもたちが出会えるような環境を作っていけたら、それは学校教育とは違う学びをもたらすことができるのではないかと思います。

まだまだ知らないことがたくさんあったり、私自身の考えが未熟であったり、私の甘さで活動に迷惑をかけることも度々ありましたが、長い間草の根プロジェクトで活動ができて本当に感謝でいっぱいです。これからも活動を続ける後輩の皆さんには、ぜひ続けて頑張ってください。ありがとうございました。

卒業・帰国した留学生メンバー

カオ トウイ ディエンさん

ベトナム出身

留学生別科

アウトリーチ教育プログラム

参加回数 通算 10 回

2015 年度春学期～ 2016 年度秋学期



バートルツォクト ナムーンダリさん

モンゴル出身

交換留学生

アウトリーチ教育プログラム

参加回数 通算 6 回

2016 年度春学期



ブジンラハム ソロンゴさん

モンゴル出身

交換留学生

アウトリーチ教育プログラム

参加回数 通算 5 回

2016 年度春学期



ファンフィンバオニエンさん
ベトナム出身

留学生別科

アウトリーチ教育プログラム
参加回数 通算5回
2016年度秋学期



楊憶瑶さん
中国出身

交換留学生

アウトリーチ教育プログラム
参加回数 通算3回
2016年度春学期



郭楠菁さん
中国出身

留学生別科

アウトリーチ教育プログラム
参加回数 通算2回
2016年度春学期



2016年度に卒業・帰国した学生が参加したアウトリーチ教育プログラム

年	実施日	実施先	参加した卒業生
2014	6/22	FC町田ゼルビアCOUMZマッチ	西郷
	10/12	さがみはら国際交流フェスティバル	西郷
	11/15	町田自然幼稚園地域公開イベント「どんぐりもりはおおさわぎ」	西郷
	11/23	相模原光が丘ふれあいいきいきフェスタ	西郷
	11/25	町田市立山崎小学校6年生2クラス	西郷
	11/29	町田市立忠生小学校わくわくクラブ	西郷
	12/16	町田市立藤の台小学校4年生3クラス	西郷
	1/18	相模原市立橋本公民館 第32回橋本こどもまつり	西郷
	1/24	YMCAオベリン保育園餅つき大会	西郷
	1/27	相模原市立くぬぎ台小学校6年生2クラス	西郷
	2/4	相模原市立向陽子どもセンター	西郷
	2/7	パルテノン多摩キッズファクトリー 児童向けワークショップ	西郷
	2/21	アートラボはしもと 総合文化学群卒業制作展ワークショップ	西郷
	2015	5/17	第2回相模台インターナショナルフェスタ
5/28		学内ワークショップ「世界のこまで仲良くなるう！」	西郷
6/20		武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニア	西郷
6/25		ボランティアフェスタワークショップ	西郷
6/29		学内ワークショップ「インドネシアの楽器で仲良くなるう！」	西郷
7/11		武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニア②	カオ、西郷
7/14		相模原市立くぬぎ台小学校6年(2クラス)	西郷
7/18		武蔵野市土曜学校世界を知る会	カオ
7/21		相模原市立向陽小学校サマースクール(低学年)	西郷
7/21		相模原市立向陽小学校サマースクール(高学年)	西郷
8/6		世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム「世界の学校」(低学年/前半)	西郷
8/6		世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム「世界の学校」(高学年/前半)	西郷
8/7		世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム「世界の学校」(低学年/後半)	西郷
8/7		世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム「世界の学校」(高学年/後半)	西郷
8/8		世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム 世界の遊び道具体験展示&工作工房	カオ 兼田 西郷
9/3		YMCAオベリン保育園4～6歳児クラス	西郷
10/11		第19回さがみはら国際交流フェスティバル	西郷
10/28		神奈川県立相原高校総合ビジネス科3年生	カオ
11/11		町田市立忠生小学校	カオ
11/21		相模原市立田名公民館 おもてなしカレッジ初級	兼田 西郷
12/5		パルテノン多摩キッズファクトリー ワークショップ	兼田 西郷
12/6		相模原市立大野中公民館 公民館まつり	兼田 西郷
12/9		町田市立武蔵岡中学校	カオ
12/13		アートラボはしもとワークショップ広場 ワークショップ	兼田 西郷
12/13		アートラボはしもとワークショップ広場	カオ
12/15		八王子市立由井第一小学校6年生3クラス	西郷
12/20		さがみはら国際交流ラウンジ お茶会 ベトナム紹介	カオ
1/10		相模原市立橋本公民館 青年学級	兼田 西郷
1/17	相模原市立橋本公民館 第33回橋本こどもまつり	カオ 兼田 西郷	
3/6	相模原市立田名公民館 第21回子どもまつり	兼田	
3/25	川崎市立南河原子ども文化センター マンカラワークショップ	西郷	
2016	4/2	町田市さくらまつり(芹が谷公園会場)	兼田
	5/25	神奈川県立相原高校総合ビジネス科	ナムナ ソロンゴ 楊
	6/18	武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニア①	西郷 ソロンゴ ナムナ 楊
	6/29	町田市立忠生小学校	ソロンゴ ナムナ 楊
	7/16	武蔵野市土曜学校世界を知る会ジュニア②	西郷 ソロンゴ ナムナ
	7/18	体験する文化祭(相模原市中央区)	兼田 西郷
	7/23	世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム「世界の学校」(低学年)	郭 兼田 西郷 ナムナ
	7/23	世界発見子ども広場夏のスペシャルプログラム「世界の学校」(高学年)	郭 兼田 西郷 ソロンゴ ナムナ
	7/26	おもてなしカレッジ in 田名初級編(相模原市立田名公民館)	西郷
	10/2	第20回さがみはら国際交流フェスティバル	西郷
	10/16	第3回ユニコムプラザさがみはら まちづくりフェスタ	西郷
	10/23	さがみはら国際交流フェスティバル	カオ
	10/26	相模原市立谷口台小学校クラブ活動	兼田 西郷
	11/16	町田市立木曾境川小学校①	ニエン
	11/16	町田市立木曾境川小学校②	ニエン
	11/26	青梅市教育委員会国際理解講座①	ニエン
	11/26	青梅市教育委員会国際理解講座②	ニエン
	12/4	相模原市大野中公民館 第29回公民館まつり	西郷
	12/7	町田市立武蔵岡中学校	ニエン
	12/10	おもてなしカレッジ in 田名 中級編(相模原市立田名公民館)	西郷
	1/22	相模原市立橋本公民館 第34回橋本こどもまつり	兼田
	1/25	相模原市立富士見小学校1年生(5クラス)	兼田 西郷
	3/5	相模原市立田名公民館 第22回田名こどもまつり	西郷

編集後記

ここに本プロジェクトの「あゆみ」第6巻をお届けいたします。20年前の1996年度、故・上山民栄先生（初代表）と故・高橋順一先生（前代表）は、本プロジェクトの立ち上げに奔走されていました。先生方お二人は、どのような思いで今の草の根プロジェクトを眺められているだろうか、そんなことに思いを馳せながら編集作業を進めてきました。

この20年間で本プロジェクトは、ワークショップや出張展示、貸し出した実物資料による授業やイベントなどを通じて、子どもから大人まで数多くの人々とつながり、時間を共にしてきました。2016年度1年間で、その数は9000人を越えます。この20年間を合計すると、のべ10～20万人にのぼると考えられます。これほどまでに多くの人々の学びに草の根プロジェクトが携わることを、20年前、誰も想像できなかったでしょう。こうして出会い、つながった多くの人々の一人一人にそれぞれ得るものがあればと、常日頃考えています。そんなところに、嬉しい知らせが一つありました。

それは、毎年本プロジェクトで留学生によるワークショップを行っている高校からでした。担当の先生のお話によると、ワークショップにおける留学生との交流をきっかけに、本学への進学を決めた生徒さんがいたそうです（約40名のクラスより2名入学）。このワークショップでは、本学に留学中の学生が、自らがどのように育ち、どのように日本と出会ったのか、そしてなぜ日本に留学生、これからどうしていきたいのか、彼らのライフヒストリーを共有します。異国で努力する留学生と間近にやりとりすることで、大きな刺激を受けたのでしょうか。これはワークショップにおける体験の影響が明確な形で現れた事例の一つといえます。

こうした顕在的な形で成果が現れなくとも、一人一人の記憶に残り、学びを引き出す体験を提供することで、これからも学内外の教育に貢献していきたいと思えます。

清水・岩本

桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクトのあゆみ Vol. 5 2016年度



発行日 2017年6月28日

編集・発行

桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクト

石塚 美枝

清水 貴恵・岩本 貴永

〒194-0294

東京都町田市常盤町 3758

桜美林大学 其中館 301

kusanone@obirin.ac.jp

<http://www2.obirin.ac.jp/kusanone/kusanone.html>



桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクトのあゆみ
Vol. 5 2016年度

文章・写真・図表等の無断転載・複製を禁じます。